

# 男性性の傷つきに敏感なジェンダー臨床論のために (その5)

-1980年代「ぼっち君」の大学生活にみる男性性ジェンダーの考察-

For Gender-Sensitive Clinical Approach to Wounded Masculinity (5) A Study of a Lonely Male Student in 1980s

國友万裕 (同志社大学) / 中村正 (立命館大学)

Kazuhiro Kunitomo (Doshisha University) / Tadashi Nakamura (Ritsumeikan University)

Key words: ジェンダー、孤立、複数の男性性 / masculinity, gender, isolation, various masculinities

## ある男性の男性性ジェンダー違和感をもとにしたライフストーリーの考察:本研究の問題意識と基本的課題の設定

ジェンダー社会における女性の被抑圧的地位に由来する被害は、フェミニズムの視点から社会的に認知されているが、同じように男性に関わる諸困難についての認識が同じ程度になされているとはいえないし、その必要性についてさえ懐疑的な論者もいる。男性が何らかのジェンダー関連の被害、不利益もしくは臨床的ニーズを訴えると、当人の意識や行動の特性に帰責されてしまい、社会的な位相において認識をすることが困難になり、ますます、当事者を追いつめることになる。問題の隠蔽・否認、自己責任化等という諸点において二次的加害の様相をジェンダー作用は男性に屈折した様相においてもたらす。とりわけ、女性に加害者である場合、男性本人が男性優位主義的意識をもつことも奏功し、女性の些細な言動に傷つき易いのだという解釈をされる場合もある。つまり、被害や要支援的ニーズを認めてもらえないばかりか、女性の被害者性を看過し、マクロな抑圧を無視する者として指弾されることもある。しかし、「男性・加害者/女性・被害者」と割り切れるほどに問題は単純ではない。むしろ、被害待性を訴えることができないことが、男性の最大の不利益な部分と言える。男性問題のフェーズをきちんと取り出し、ジェンダー社会における臨床的課題の裾野を広げることになる事例分析を行う。男性のライフサイクルの諸相において、そのミクロとマクロの双方からジェンダー作用と影響について考察することはこれからの課題となっているという問題意識のもとに研究をすすめている。今回は、男性性ジェンダー役割に違和感をもつ大学生のエピソードをとりだし、青年期の諸特性と関わりながらどのようにそれが感受されていたのかという観点から特徴づけていく。その作業をとおして、男性性ジェンダーの自己同一性構築に困難をもたらすという観点からの心的苦痛とジェンダー視点から女性学としてエンパワーメント作用をもたらしつつあった1980年代の裏面としての男性性ジェンダーの沈黙の様相が可視化されていく。

## 方法と分析:男性性研究によるエピソード分析

被害体験のある男性のライフストーリーのエピソードの分析を行う。ある男性の経験をもとにした、主観的には否定的な体験の相互作用の機微を一つずつ紐解いていく。微視的な体験の考察をとおして、そこに機能している男性性ジェンダー作用を分析し、男性性体験のスペクトラムの広がりを読み解きたいと思う。これを複数の男性性と位置づける。以下のように、ある男性の男性性ジェンダー違和感のエピソード記述をもとにしたライフストーリー構成をとおして以下のように分析を加えていく。今回の分析と考察の背景はジェンダー論が隆盛し始めた1980年代である(表面的に平和で保守的な時代。ユーミン、サザン、松田聖子の歌などが流行る。ノンポリ学生だった。大学はレジャーランドとも呼ばれた)。

①ジェンダーロールモデルを内面化できない葛藤(普通になりたいという言葉で自縛自縛風に苦しむ。毎日が嵐のような心の葛藤。しかし、高校までの不登校のブランクは大きく、糸口が見出せない。大学は基本的に横のつなが

りが希薄であり、コミュニケーション能力にかけているため居場所がない)

②去勢と虚勢(不登校で高校に行かなかった劣等感のため、自己評価が低い。自己主張できず、去勢されたように思う男子だった。一方、他の男子たちは虚勢をはり、強がり、女子にカッコ良く見られようとする青年期のジェンダーパフォーマンスを試みていた)

③女性の世界の政治学(英文科で女性が8割近いため、女性の「暴力性」にさらされる。入学して半年ほどたってから、クラスで同じグループの女子が突然口をきいてくれなくなる。彼女の友人が悪口を言い出したため、彼女はそのままに巻き込まれてしまい理由もない意地悪。また別の女子から悪口を言われていることを告げられてこられる。毛嫌いされている気分になり閉塞感に苛まれる)。

④「いばる男・すがる女」という図式(虚勢されたような男子であったため支配しやすというイメージで見られる。そのため男子からは支配的な友情の標的とされる。女子からはすがりつき、泣きすがる対象とされる。この図式でストーキング被害も受ける)

⑤女性のご都合主義的ジェンダー感(男子のほうは恋愛相手の女性の異性経験の有無にはこだわらないものが多いにもかかわらず、女子のほうは、異性経験のない男とはつきあいたくないと語るダブルスタンダード。女が親の脛をかじることは許されるが、男は自分ですべきだという逆差別的感覚の女性も多い。女が弱いのは許されるが、男は強くあるべきとされる)

⑥大学生らしくない行動(どこにも糸口が見出せないため、親に長距離電話で悩みを打ち明けるしかない大学生男子の恥意識。その結果、大学生の男子らしくないという自己嫌悪が増幅)

⑦フェミニズムという言葉の誤用(当時はまだ女性に優しい男性をフェミニストと呼んでいた。レディファーストしてくれる男性)

⑧日本は男性優位主義という誤解(当時は欧米よりも日本のほうが男尊女卑であるという「誤解」が浸透しており、日本の男は反省すべきであるという風潮であった)。

## 考察

男性性の傷つき(被害待性や脆弱性)に敏感な男性性ジェンダー論の展開にとって、自我同一性・アイデンティティ概念は再考されなければならないと考える。女性性ジェンダーについても同様な問題提起があった経過からする(ギリガンら)と同じことは男性性ジェンダーについてもいえるはずである。さらに「LGBT・Q/X」(レズビアン、ゲイ、バイ、トランスそしてクイアとXジェンダー)についても同様である。これらのエピソードはジェンダー概念が登場しつつあった時代の裏面から、沈黙化しがちな男性性ジェンダーの可視化として位置づけることができる。

文献:中村正「臨床社会学の方法(14)男らしさのラビリンス(迷宮)」『対人援助学マガジン』第26号、2016年/國友万裕「男は痛い!」『対人援助学マガジン』(連載)/キャロル・ギリガン『もうひとつの声・男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』(川島書店、1986年)